

日付:2014年9月14日／聖書:創世記32:23～33

主題:「ヤボクの川を渡る」

兄エサウの群れが迫る中、ヤコブは家族のものを先にヤボク川を渡らせた。一人残り思い悩んでいると、そこに何者かが現れ格闘する。その者をつかまえて離そうとしない。ヤコブ自身が、恐怖の余り藁にもすがる思いで、必死になってもがいているということか。そのため必死で神に求める姿、恥も外聞もない姿を露わにして神を求める姿なのか。ここは良くそういう意味で「求めよ、さらば与えられん」として神に求めるヤコブの信仰の素晴らしさを語る場所であったりするが……。もちろん、その信仰の熱心さは大事であろうと思うが。ただそのヤコブの行為が腑に落ちない。このヤコブの姿は、みっともない姿だと思う。妻子を先に川を渡しておきながら自らは渡ることに躊躇し、兄が怖くてウジウジしているように思ってしまうが……。

この物語をもう一度、アブラハム、イサク、ヤコブの物語の流れから見ていくと、アブラハムもイサクもそうであったが、ヤコブが恐れていたのは、「争い」を如何に回避できるか、ということにあったのではないと思う。イサクもそうだが、井戸を巡っての争いをどんなに仕掛けられても、争いを避けてきた。井戸は命の源。水を確保できなければ人は生きられない。人間の歴史は、資源を得るため、よりよく生きるため、他よりも裕福に生きるために、人間は争い、戦争を好んで行ってきた。それは今も変わらない。しかし族長物語では、多数派の中で少数派として生きる姿を示し、アブラハムはあくまでも寄留者としての歩みを見せている。イサクが争いを避け、何度も井戸の水場を譲ってきた。それは、次に水場が見つかるという保証は全くない中での決断であった。しかし、イサクの群れはついに争いのない平和な水場を見つけることが出来た。

ヤコブは必死になって、神の使いにすがり自らの力で何とかしようとするが、神はヤコブの腿の関節を打つ。ここはヤコブの肉を打ったということ。肉の思いを断つということであろう。自分がどうにかしなければ、自分が、自分がという肉の思いを叩かれたのかと思う。神は、ヤコブの名前を改め、イスラエルと呼ぶ。ヤコブの名の意味が、かかとを掴む、“自分が闘う”という意味に対し、イスラエルの意味は“神が闘う”である。それは“神にゆだねる”ということである。神にゆだねて自分は何もしない……ではない。ヤコブは、神が闘う、神にゆだねるというイスラエルの名を頂いた時、躊躇していたヤボクの川を渡っていくのである。(神谷)